

進捗状況の概要 【1ページ以内】**■千葉大学と4米国大学で構築した13のCOILを用いたユニーク・プログラムの実施**

本事業では、その大学でしか学べないユニークなプログラムを COILを用いて千葉大学と連携大学の間に設置するものである。当初計画では、1年目8プログラム(学部)(1プログラムは1授業)、3年目8プログラム(大学院)、5年目8プログラム(学部4大学院4)の24プログラムを設置する予定であった。したがって中間評価時点には、8プログラムの予定であったが、その**162.5%となる13プログラムを構築**することができた。これまでに、構築したプログラムは、全て学部向けのものであるが、そのうちいくつかは大学院学生でも学習効果が得られるプログラムであり、今後のプログラム設置計画では、大学院プログラムとすることも検討できる。

■設置した13プログラムのユニークネス

作成したプログラムは、国際教養学部、文学部、教育学部、工学部、看護学部の5学部にまたがっている。千葉大学の半分の学部がプログラムの提供と受け入れを実施していることになる。また、今回作成した13のプログラムは全て共同で開発している。構想段階では、どちらかの大学が主担当となることを決めてプログラムを構築する構想であったが、全てを連携大学と完全な共同プログラムとして設置でき、この点では、構想段階以上のプログラムを構築できている。そして、設置したプログラムは、当初の構想通りユニークなプログラムとなっている。中でも、特に、構想段階にはなかった「**防災デザイン (Disaster Preparedness)**」(No.13ニュースクール大学と実施)は現在世界的に直面する危機にどのように対応するかを考える科目で、実践的かつ、ユニークな科目を日米共同で独創性をもって開発できた。このように極めて柔軟かつ先進的な取り組みを実現できている。

■計画の231%の派遣・154%の受入を実現

交流プログラムにおける学生のモビリティに関しては、中間評価までの**派遣計画35名に対して81名、受入計画35名に対して54名**と計画を大幅に上回る成果となった。**COIL受講者数の本学学生は計画240名に対して468名、米国の4大学(UA, CU, SBU, NS)の計画120名に対して263名が受講**し、本格的な全学展開に向けて十分な基盤を築いたと言える。分野については、総合大学の特徴を生かし、デザイン、看護、美術教育、歴史、社会科教育、防災など多彩な科目にCOILを導入した。体系的・段階的なプログラム整備がほぼ完成したことも特筆に値する。講義型授業を中心とした初年次科目(100番台)、ディスカッション型授業を中心とした高年次科目(300~400番台)、大学院実践教育プログラム(600番台)、まで段階的にプログラムを整備することで、学生が無理なくCOIL JUSUに馴染み、大学間交流・学生間交流が持続的に展開するシステムを構築した。さらに、COIL JUSU+VIP用のユニーク・スマート・ラーニング教材について、国立歴史民俗博物館と連携し開発を開始した。

表 開発した13のプログラムの連携大学・主担当学部・プログラム名

	連携米国大学	千葉大学・科目実施学部	協働コース名	学生(派遣・受入)
1	アラバマ大学	看護	Global Health and Nursing II	派遣
2		教育	Public and Private	派遣
3		教育	Art History and Art Education	
4		国際教養	World Issues from Social Science	
5		文・国際教養	History of International Society	受入
6		国際教養	Academic Writing I	
7		国際教養	Intensive English	派遣
8	シンシナティ大学	文	Exploring Religion and Culture in Japan	受入
9		工	Packaging Design	受入・派遣
10		工	Integrated Packaging Design Studio	派遣
11	ストーニーブルック大学	国際教養	Community PBL III	派遣
12		国際教養	Contemporary Religion in Japan	受入
13	ニュースクール大学	工・国際教養	Disaster Preparedness	派遣

【本事業における中間評価までの交流学生数の計画と実績】

(単位：人)

2018年度				2019年度			
派遣		受入		派遣		受入	
計画※	実績	計画※	実績	計画※	実績	計画※	実績
15	17	15	16	20	64	20	38

※海外相手大学を追加している場合は、追加による交流学生数の増加分を含んでいる。

特筆すべき成果（グッドプラクティス）【1ページ以内】**■ユニーク・プログラムの多様性と参加学生の多様性**

本事業で開発したプログラムは、その国やその地域でしか学べない、歴史や文化から先端技術に至るまで多様なプログラムを提供できている。それとともに、参加する学生の多様であり、日米双方でのべ731名の学生が参加している。以下に本事業で開発できた代表的な3つのユニークなプログラムについて述べる。

●「宗教学と日本」をテーマとするユニーク・プログラムの発展的展開

本事業は、「日本と米国のユニークなプログラムを共同で構築していく」ものであり、2018年度に「Contemporary Religion in Japan（日本の宗教）」コースを開講した。このコースは、千葉大学が日本の宗教に関するプログラムを、ストーニーブルック大学が宗教学概説のプログラムを提供するものであり、1週間の日本におけるフィールド・ワークを含むユニーク・プログラムである。ストーニーブルック大学の宗教学をバックグラウンドに持つ学生たちは、千葉大学が提供したビデオ遠隔授業により、日本の宗教について学び、リーディング課題をこなした上で来日した。フィールド・ワークでは成田山や明治神宮のような大規模で公的な性格を持つ場と千葉神社のようなローカルな場を実際に訪れたことで比較の視点を獲得し、日本の宗教に対する深い理解が達成された。このコースは、2019年度に更に拡充され、

「Community Problem Based Learning III」コースと重層的に補充しつつ進められ、将来的にインターンシップあるいはボランティアを付加して、COIL+VIPプログラムとすることを検討中である。また、2020年度には、関連科目として「Religion in Japan and the United States」コースが設定され、ストーニーブルック大学から仏教学のスマート・ラーニングが提供される予定である。



図1 千葉神社でのフィールド・ワーク

●「防災とデザイン」をテーマとする文理混合アプローチ

2019年度に開設された「Disaster Preparedness」コースは、工学部専門科目「Global Studio Projectwork」とニュースクール大学の「Disaster Preparation」であり、工学的なセンスと人文知の混合的アプローチにより実践的な課題を解決しようとする試みである。例えば、「Earthquake」、「Flood」、「Power Blackout」、「Typhoon」等のチームに分かれ、事前学習を行った後、オンラインを通じてニュースクール大学の講義の一部に参加し、最終的に各チームがプレゼンテーションビデオを作成し、日米で共有した。プレゼンテーション作成の過程では、ニュースクール大学からオンラインでコメントがなされた。本プログラムの目的は、日米双方における一般的な自然災害について学び、緊急時の対応について考え、自然災害対応におけるデザインを試みることであった。最終プレゼンテーションにおいて、各チームは「洪水への対応を人々に教えるための仮想経験のゲーム案」、「防災週間のアイデア」、「防災キットのコンセプト」、「地震の際の行動の仕方を教えるインタラクティブ・ゲーム案」、「直近の避難所と避難経路を示すアプリケーション案」を発表した。

主な参加者は、千葉大学側では国際教養学部、工学部の2～3年生であり、ニュースクール大学側は8割程度が修士課程の学生であった。本コースは、国際教養学部が重視する「俯瞰力」「発見力」「実践力」の3つの能力を集約して臨むことが求められる国際協働学修となっている。また、米国側に大学院生の参加者が多いことから、今後、大学院レベルのコースの開発にもつながることが期待される。



図2 最終プレゼンテーション

●博物館型実践研究の拠点との高度な連携

2019年度にアラバマ大学と共同で開設された「History of International Society」コースでは、国立歴史民俗博物館の展示を素材として、日米混成の4チームが日本の歴史を紹介するプレゼンテーションを作成し、ZOOMおよびKnoviolによりオンラインで最終発表を行った。参加した国際教養学部生は、「アラバマ大学の学生は文理問わず複数の学部からこのプログラムに参加しており、多様な分野からの視点、そして日米の異文化コミュニケーションを通じて、自分の専門にとらわれずに、より国際教養学部生らしく、ものごとを考えることができた。」との感想を寄せている。これをベースに、また、シンシナティ大学との「Exploring Religion and Culture in Japan」プログラムとも共同で博物館型実践研究の拠点である歴博との連携を強化し、2020年度のインターンシップ受け入れを視野にいれ、

COIL JUSU+VIPの開発中である。歴博の日本古代史、中世史、近世史の専門家が監修した「スマート・ラーニング」教材の共同開発が開始されている。インターンシップの実施に際しては、千葉大学および連携している国立大学（新潟大学、金沢大学、岡山大学、長崎大学、熊本大学）の学生とともに、展示室を教材として国際協働学修を実施する予定である。米国側の参加者についても、シンシナティ大学だけでなく、アラバマ大学等の他の連携大学、さらには米国以外の千葉大学の海外協定校にも拡大していくことを視野に入れている。



図3 国立歴史民俗博物館 展示

以上のようなプログラムを24以上構築する。